

「しっかり考え」「きっちり判断でき」「げんきな」式中生をキーワードに

～母校だと誇って言える学校に（平成26年度生徒会スローガン）からの出発～

川西町・三宅町式下中学校組合立式下中学校長

木 寅 雅 史

1 はじめに

川西町結崎といえば、観世能発祥の地。観阿弥清次がこの地に移り活躍する中、世阿弥元清は申楽能の完成に情熱を燃やした。また、三宅町屏風は奈良盆地の真ん中にあり、南には耳成・畝傍・香久山の大和三山を望み、西には信貴・生駒・葛城・金剛の山々を眺める風光明媚な地である。この地で生まれた忍性は日本で最も古いハンセン病患者収容施設と伝えられている「北山十八間戸」の建設に尽力し、弱い立場の人々から「生きた菩薩さま」と敬まれていた。その両町を結ぶ「太子道」は、別名「筋違い道」と呼ばれ、飛鳥と法隆寺を結ぶ聖徳太子が通われた通学路である。

本校の校章にも、それらの歴史と人々の思いを込められている。青垣山が四方を取り巻き山麓に瑞雲たなびく奈良盆地、その中央に建つのが式下中学校である。その開校65年目を迎えた式下中学校（母校）に、平成26年4月、母校から巣立って40年目ぶりに校長として赴任した。県下唯一の組合立校である式下中学校は、正式名称「川西町・三宅町式下中学校組合立式下中学校」で、生徒たちの調べ学習によると、全国で2番目に長い校名だそうだ。

2 生徒の実態から

生徒の多くは素朴で純真であり、生徒会活動や部活動、ボランティア活動に意欲的に取り組んでいる。しかし、授業に集中できず教室に入れない生徒や異装や茶髪、器物破損、喫煙、対教師暴力等のいわゆる「荒れ」の姿を見せる生徒がいた。その当時は、奈良県教育委員会の生徒指導アドバイザーが本校に常駐勤務して、事後指導型中心の生徒指導が行われていた。校長として教職員との初めての出会いの第一印象は、「疲弊感」である。

3 経営方針の重点化をグランドデザインに示し、学校評価を学校運営に活かす

奈良県教育委員会学校教育アドバイザーチームに所属していた頃（H22）に、学校訪問を実施した管理職の先生方に、学校グランドデザインの作成と、それに基づいた学校経営をお願いしてきた。よって、私の校長の仕事の第一歩が式下中学校のグランドデザイン作成と、目的意識の持てる教職員ワーキングチームの編成からだった。目指す生徒像は、「しっかり考え（知）、きっちり判断し（徳）、げんきな（体）式中生」である。その生徒育成に向け、校長として教職員ワーキングチームを編成して、年間計画をPDCAサイクル化することを進めた。また、学校課題の焦点化とその取組の総括を、学校評価システムと共に行うマネジメントを行った。その実践の積み重ねで教職員にチームとしての意識化が図れたし、学校評価アンケートでも具体的・特徴的な推移がみられた。（H27 → H28 → H29）

○「安心した学校生活を送れている」（生徒）〈77.1%→83.3%→84%〉

○「子どもたちは学校で生き生きと生活している」（保護者）〈69.8%→80%→80.6%〉

○「式下中学校は特色ある取組を行っている」（教職員）〈79%→75%→90%〉（生徒）

〈35.9%→ 56%→ 63.4%〉

- 「分かりやすい授業を行っている」（教職員）〈75%→ 88%→ 93%〉（生徒）〈55.8%→ 70.7%→ 72.4%〉

また、年度末に行う学校評価やチーム評価表を使い、ワーキングチームの総括を行うことを通して、次年度の最重要課題を設定した。平成30年度は次の6点である。

- ①生徒指導（授業・部活動の「学びの場」の充実。生徒会活動の自主・自立の活性化）
- ②授業づくり（シラバスの作成・公表、めあてと振り返りのある授業の創造、授業時間確保）
- ③人権学習の推進（自己有用感・達成感のある集団づくり、キャリア教育・進路保障のある学習展開）
- ④教育相談（悩みを聞く二者・三者懇談会の充実、つづることで心をキャッチする取組を）
- ⑤学校行事の魅力化と特色化（生徒の自主活動の活性化、夢現スペシャリスト講演会の継続）
- ⑥学校と家庭の連携で行う情報の周知

この重点項目を次年度のグランドデザインに盛り込んだ。そうすることによって、たとえ年度や校長が変わっても、途切れることのない、学校経営の良いスパイラル化が図れると考える。

4 命の大切さと自らの生き方を考える「夢現スペシャリスト講演会」

かつて本校は、「輝け未来のスペシャリスト講演会」という特色ある活動を行っていた。「オンリーワンに生きる」（野依良治博士）、「がんばれ野口みずき選手」、「ヨットマン、堀江謙一さん」、「夢を追いかけて」（アテネ五輪シンクロナイズドスイミング武田美保氏）、「世界陸上為末大さんを招いて」等等。また、本校の卒業生の元プロ野球選手の駒田徳広さんや世界陸上選手の木村慎太郎さんも、ようこそ先輩として学校に招く機会を持ってきた。しかし、約4年間、このスペシャリストは、学校の実情のため途絶えてしまった。もう一度、スペシャリスト講演会のような取組で、学校活性化を図りたい。そんな想いから夢現スペシャリスト（生徒たちの「夢」を現「現」してほしいという願いをこめた）講演会を、町教委の支援のもと進めることができた。第一回は、平成27年度「ボクシングで夢を拓く」（芦屋大学・樋山茂氏）、「スポーツ関心意欲向上」（NOBY T&F CLUB 荒川大輔氏）の講演会を実行委員会組織で運営を行った。その取組は、平成28年度第二回「音楽で心を響かせ」（音楽療法士・高本恭子氏）と続く。そして、平成29年度スペシャリスト講演会のテーマを「命の大切さと自らの生き方を考える」として、取組を進めた。

①H29夢現スペシャリスト講演会ステップ1

1学期の終業式に薬師寺副執事長の大谷徹柴氏による「心の学校」講演会を実施。「花の色が違うように、人の良さや可能性には、誰一人として同じものはない。人それぞれに花がある。花の咲かない寒い日は下へ下へと根を伸ばせ。やがて、でっかい花が咲く。」という講話であった。

②H29夢現スペシャリスト講演会ステップ2

2学期初旬の「命の講演会」（講師青少年犯罪被害者の会 青木和代氏）を避難訓練とあわせて実施。奈良県警察本部犯罪被害者支援室とも連携して、いじめのため息子悠君の命を奪われた青木さんの話を聞いた。生徒・教職員・PTA本部役員の参加者全員が、命の大切さを実感できた。

③そして、H29夢現スペシャリスト「生命のメッセージ展」ステップ3

9月の2週間、図書室を会場に「生命のメッセージ展」を開催。その期間に、全てのクラスが道德の時間を使って、メッセージ展の学習を行った。また、学校開放時間（放課後1時間、開館管理を輪番でPTA本部役員と各クラス学級委員が担当）を設定した。学校開放の時間には、本校の保護者や磯城郡内の先生方や地元関係者の方々 156人の見学者があった。本校が発信源になり、命の大切さを啓発できたと考える。この取組は11月の文化祭での掲示紹介、1月のメッセージ展主催者への赤いハートノート（メッセージ展参加者の感想と教職員寄せ書きを1冊のノートにまとめたもの）贈呈式へと続いた。



5 おわりに

これまで大切にされてきた本校の校風や特色ある取組がある。クラブ活動やボランティア活動に大変熱心な生徒たち。地域や保護者からの学校への関心も非常に高い。生徒指導面で課題が多い本校で、グランドデザインの生徒像を「しっかりと考え、きちんと判断でき、げんきな式中生」（しきぎげ）をスローガンに据えたには、大きな意味がある。また、教育実践の積み重ねの出発点は、平成26年度生徒会スローガンの「母校だと誇っていえる学校に」からである。自分の生まれ育った「ふるさとや母校」を誇りに思える式中生に育つことを強く願う。そのためには、本校の教育の特色をしっかりと理解しながら、今後も学校教育を生徒や教職員と共に進めたい。